
君のために～孤独な戦い～

あずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君のために〜孤独な戦い〜

【Nコード】

N4390D

【作者名】

あずき

【あらすじ】

高校二年の悟ゆづは中学の時からずっと川添早織なみぞのことが好きだった。今年ことしは修学旅行がある。しかし、楽しいはずの修学旅行が・・・果たして、悟は早織を救えるのか？また、その手段は正しかったのか？

終末（前書き）

この本に目を通していただきありがとうございます。
文法上や物語性におかしい点がございましたらお願いします。

終末

俺の目の前では聡が怒りに歪んだ・・・いや、悲しい顔をしながら俺を見下ろしている。

精一杯の事はした。大事なものをたくさん切り捨てた。

“これで川添さんを救うことになっただろうか？”

恋話（前書き）

ここからが始まりです

恋話

聡さとし

「なあ、悟さとる、いい加減好きな人教えるよ。」

悟

「そのうちな。」

聡

「出た！またそのセリフかよ。いつまでもそんなこと言っ
て逃げると女も逃げちまうぞ？」

悟

「またそのセリフかよ。俺は告白するきないから逃げられても
いいの。」

聡

「・・・そんじゃさ、賭けしようぜ。」

悟

「賭け？」

聡

「ああ、乗るなら俺の重大な秘密を教えてやるよ。」

悟

「お前の秘密なんて全部知ってるよ。」

悟と聡は幼稚園からの付き合いで、お互いに何でも知っていた。

聡

「いや、昨日決めた事だから誰も知らねえよ。」

悟

「・・・松浦さんに告白・・・とか？」

聡

「・・・ああ。修学旅行前日にするつもりだ。応援しろよ？」

悟

「おう！でも、何で前日？修学旅行中のホテルとかの方がよくないか？」

聡

「初デートが海外なんて最高だろ？」

悟

「・・・まあできるといいな」

（修学旅行前日）

聡

「悟・・・俺フラれたら自殺するわ・・・」

「お前昨日までかなり自信ありげに話してたよな？」

悟

「修学旅行が終わってからにしてくれ。今すると修学旅行が台無しになる」

聡

「おい、そこは普通、大丈夫！お前ならイケル、だろうが」

悟

「はは、まあちよつとは気が楽になつただろ？」

聡

「ならねえよボケ。・・そんなじゃ男聡！戦場へ行つてきます！」

聡と松浦千夏ちなつの関わりは去年の入学式からだ。

天然の松浦さんは入学式当日に上履きを忘れてしまい、困っているところを、松浦さんの可愛らしい様子に心を打たれたのか、聡が上履きを貸してあげたのである。

そして、今年に入り、運良く俺達と同じB組になったのだ。

“ たぶんイケルだろ ”

と俺は思った。

数分後、聡が戻ってきた。

悟

「どうだった？」

聡のニヤケた顔からすると聞くまでもないが、念押しに聞いてみた。

聡

「・・・さあ悟！好きな人教えろ！」

どつちから返ってきた返事を言うのが恥ずかしいようである。

悟

「ああゝ．．明日教えるわ」

聡

「．．まっいつか。そんじゃ俺はハニーを送るからじゃあな！明日絶対教えるよ！」

そう言っつて聡は駆け足で校門へ向かった。

修学旅行の飛行機にて

修学旅行先は韓国である。

俺は韓国に近い福岡に住んでいるが、今回が行くのは初めてとなる。

先生

「皆集まったな？よし、それじゃ飛行機に乗るぞ。わかっていると
は思うが中では静かに。絶対キャビンアテンダントさん方に迷惑か
けるなよ」

..先生。アンタ昨日、飛行機といえばキャビンアテンダントに決ま
りだ。修学旅行の楽しみの一つでもある、とか言ってたよね？メル
アド聞く気満々だったよね？..

そんな事を思いつつ俺は機内に入った。

..機内にて

聡

「さあ、悟。さっさと教えろ」聡がニヤニヤしながら聞いてきた。

田中

「何の話？」

「何？恋話？」

田中と亨が話に入ってきた。

田中はクラスの委員長で皆のまとめ役だ。

亨は二年になって知り合い、なかなか話のわかるやつだ。

聡

「コイツ今回の修学旅行で告白するんだ」

亨

「え？！マジ？！誰に？！」

悟

「いや、告白なんてしないよ。聡、教えるから黙ってくれ」

そういつて俺は聡の耳元でいった。

・川添さん、

聡

「へえー。悪くはないけど、お前けっこう変わったタイプだな。」

川添^{かわぞえ}早織との関わりは中学の時からだ。・変わったタイプ、ってのは彼女がそうであるからだ。

川添さんは頭がよく、すごい才能の持ち主だ。希望校は東大で、ものすごく勉強熱心だ。しかし、そのぶん世間知らずでもある。プレイステーションすら知らないくらいだ。

俺にとってはそんなことはどうでもよく、彼女の家庭的で優しい雰囲気^{雰囲気}に引かれたのだ。
ところが、高校に入ってから組が離れてあまり話していない。

亨

「で、何なの？好きな人の事？」

田中

「もしかして・・・D組の山田さん？」

山田桃江^{ももえ}は頭がよく、顔もいいのでかなり噂になっている人だ。
また、俺とは中学から関わりがある。しかし、話好きの彼女は、女子とあまり話さない俺にとっては苦手なタイプである。

悟

「いや、山田さんとはよく話すけど付き合おうなんて思ってないよ。
て言うか誰にも告る気ないよ」

田中

「え〜！何で？悟君ならイケそうなのに・」

聡

「そつだぞ。お前シレッと頭いいし、運動神経抜群じゃねえか」

俺は剣道部で、この前の大会で個人3位をとった。

悟

「頭は田中の方が圧倒的だし、剣道では佐々木に負けたよ」

亨

「で、好きな人は誰なの？」

亨が再び聞いてきた。

聡

「・・・そりゃ・・・はるかだなんて言えないよな・・・」

ここで聡がうまく笑い話に変えてくれた。

田中

「えっ本当に?!」

亨

「ははは、そりゃ変わったタイプだな」

安藤はるかとは俺のクラスのマドンナ的存在であり、

顔は悪い

性格荒い

女感0

・・・女感なんて言葉あつたっけ・・・?

まあそれはどうでもよく、とにかく男に対しては酷く、女に優しい人物である。

悟

「おいコラ、聡ばらすなよ」

聡

「悪い悪い」

先生

「お前らうるさいぞ。キャビンアテンダントさん達に迷惑だろうが」

こんな話をしているうちにうるさくなってきたので先生に注意された。

.. 先生。アンタさっきキャビンアテンダントさん達に、よろしくお願ひします、とか言いつつ両手で握ってたよね？それってキャビンアテンダントさん達にとって困ることなんじゃないの？それに今はキャビンアテンダントさん達は1人もいないよ？..

と思いつつも静かにすることにして、会話は終わった。

修学旅行の空港にて

やっと韓国に着いた。

聡

「あゝやっと韓国に着いた。腰がいてえゝ」

悟

「とりあえずトイレに行かね？俺今ヤバいんだわ」

聡

「あゝ俺もだ」

と言つことでトイレに行くことにした。

聡

「ウザッ、人多すぎだぞ」

俺達と同様に多数の生徒がトイレに来ていた。

悟

「そつだな。・・・少し離れたところに行くか。」

というので、少し歩いて別のトイレへ向かうことにした。

トイレを探す間に色々な店があった。もちろん広告の字は読めない。日本でないのほとんどの人が意味わからない言葉を発している。

悟

「あれトイレじゃね？」

「

聡

「俺ヤバい。走るわ」

そう言っつて聡は走つてトイレへ向かった。
しかし、俺はみっともなく感じたので余裕をかまして歩いて向かった。

？

「悟・・君？」

いきなり横から声をかけられた。
振り向くとそこには川添早織がいた。

悟

「あつ、川添さん」

信じられないの出来事で俺は驚いた。どうやら人を待っているようだ。

早織

「あつ、ごめん。おどかせちゃった？」

悟

「いや、全然大丈夫だよ」

正直、それより俺にとってはトイレの問題の方が問題である。

早織

「ずいぶん久しぶりだね。最近どう？」

正直、はやくトイレに行きたいが、せつかくの川添さんとの会話を台無しにしたくない。

悟

「最近は順調かな。けど、そろそろ将来のことを考えないとな。川添さんはどうするの?」

早織

「私は医者になろうと思ってるの。できるだけ多くの人を救いたな
って思ってる」

悟

「川添さんほどのひとなら絶対できると思っよ。」

ここで俺の腹は限界にきていた。なのでここで会話を終わらせよう
と思った……が。

聡

「お、早織もいるじゃん」

聡がトイレから出てきた。

早織

「あ、聡君」

聡

「何これ? いい感じ?」

聡がニヤニヤしながら言ってきた。

早織

「ち・違つよ。トイレの友達待ってたらちよつと悟君にあつただけだよ」

俺の気持ちは少し悲しかった。普通なら落ち込んでいるはずだが、トイレに行きたいがために、他の事を考えている余裕がないのだ。

聡

「な〜んだ。せつかくなんだし時間もしばらくあるから話そつや」

聡は俺のために言ったつもりだろう。

しかし、今の俺にとっては逆効果だ。

“ヤバい・腹が・”

とそのとき、

女子

「早織お待たせ〜」

川添さんの友達らしき人がトイレから出てきた。

早織

「あつ、ごめんね。聡君と悟君。友達出てきたからもう行くね」

“助かった・・・・
が、しかし

女子

「何ナニ？お友達？」

早織

「中学のときの同級生」

すると聡が

聡

「聡と申します」

聡はその女子を気に入ったらしく、自分から自己紹介を始めた。

「お願いだからトイレに行かせてくれ……ていうか、お前彼女いるのにそんなに目が浮かれてていいのか?」

そして仕方なく

悟

「……悟です」

女子

「かおる佐藤薫です」

相手も礼儀正しく返事をしてきた。

「……ヤバい・破裂しそう……」

このとき俺は死にそうだった。
俺の状態を読んだのか、聡が

聡

「そついやトイレにキーホルダー落ちてたけどお前のだった？」

悟

「ああ、俺のかも。」

といい、俺はダッシュでトイレに入って事を済ませた。

.. 助かった..

出てきたらそこには聡だけがいた。

悟

「二人は？」

聡

「他の女子と買い物に行った」

悟

「ああ・・・そう・・・」

聡

「まあそんなにガツカリするな。またそのうち次があるからな」

悟

「別にそこまで落ち込んでねえよ」

このときは考えもしなかった。次の川添さんとの機会がきたのは俺

の人生を大きく傾けることとなるとは。

修学旅行のバスにて

先生

「皆そろったな？そんなじゃ中に入るぞ。バスの中では悟達みたいに好きな人などについて話してていいぞ。」

.. シレッと何いらんこと言ってんだアンタは！..

はるか

「何?!悟は好きな人がいたの?!教えて、いや、教える。じゃないとまた私の拳が唸るわよ!」

前のこの安藤はるかを紹介で言い忘れていたが、この女は空手二段だ。とてもかなうような相手ではない。俺は骨折させられたくらいだ。しかし、今回は状況が味方してくれている。

悟

「そんなことしてもいいの?安藤さん?今こんなところで面倒沙汰起こせば日本にバイバイだよ?それでもいいならどうぞ」

といった時だった。俺の股間に強烈なバットを当てられたかのような衝撃がきた。そして俺はその部分を押さえて縮こまる。

バスの横でもがき苦しむ俺。

腹を押さえて爆笑する男子。

こっそりと笑う女子。

そして、なぜか何も言わない先生。

“・・・先生。アンタこの女に言うことあるだろ？先生だろ？目の前で生徒が生徒にけられたんだぞ？しかもアンタ、男ならこの苦しみわかるだろ？こんなに危ない女を韓国に置いといていいのか？黙ってていいのか？”
俺はこんな思いで先生を睨んだ。

先生

「そんじゃ中に入るか。」

“シカトかよ！”

そして、安藤はるかが笑いながらバスに入っていく。
また、俺は田中と聡に支えられながらバスに入ってしまった。

くバスの中にて

バスの中では皆が盛り上がっている。

亨

「修学旅行では何をしたい？」

俺の前の席の亨が聞いてきた。

悟

「俺は安藤さんを日本にバイバイできればそれでいいや。」

さっきの出来事で恥をかいた俺は安藤さんをかなり恨んでいた。

静香しずか

「悟君って結構キツイ事言うのね。」

岡山静香が話題に入り込んできた。

この人は亨と同様に二年生になってから知り合った。しかし、あんまり話はしない。

俺の隣の聡がいった

聡

「コイツ影では色々ときつい事言ってるんだぞ。」

「いや、安藤さん以外には言ってるねえよ。」

岡山さんの隣に座っていた聡の彼女の松浦千夏が言った。

千夏

「へえ〜。悟君ってスパイみたいな人なんだね。」

「意味わからん。」

悟

「いや、言ってるのコイツだから。」

俺は聡に目を向けながら言った。

悟

「コイツは女子の顔について色々文句言ってるんだよ」

事実、聡は顔についてはうるさい。

聡

「いや、文句じゃないぞ。千夏って可愛いよなあ、みたいにい意味で言ってるんだ。」

聡がすぐに答えた。そして松浦さんが顔を赤くした。

静香が自分の名前が出なかったことに不満を持ったのか、

静香

「ネエねえ、あたしは？」

聡

「もちろん！」

静香

「きゃー！」

静香はいい意味でこれを受け取った。

..、もちろん、に続く言葉は何だ？

..

静香

「ネエねえ、悟君はあたしをどう思うっ？」

正直普通

悟

「もちろん。」

聡と同じ手段を使ってみた。・・・が

静香

「もちろん何？」

悟

「聡と同じ意見だよ。」

我ながらうまい事言った。

静香

「やった〜！」

亨

「で、聡は何したい？」

亨が話題を戻そうとした。

聡

「俺はハニーと初デート！」

亨は驚いた。

松浦さんはまた顔を赤くした。

岡山さんはニヤニヤしながら松浦さんをつついている。

亨

「え?!付き合ってたの?!誰と?!」

悟

「コイツ昨日から安藤さんと付き合い始めたんだよ」

その時聡が俺のスネを蹴った。

俺は思わずうずくまる。

聡

「んなわけねえだろ!俺のハニーは千夏だ!」

松浦さんは顔を赤くしたままだ。

亨

「へえ〜そうだったんだ。確かに二人は仲良いもんな。」

俺の左斜め前に座っていた先生が話題に入ってきた。

先生

「なんだ?聡は萌え系が好きなのか?」

「先生。アンタは生徒に向かってそんな言葉を発しているのか?自分の生徒に平気でそんな言葉を言える立場か?松浦さん聞いているぞ?せめて可愛らしいにしとけよ。」

聡

「先生は甘いッスね。千夏はかなり気のきいた女ッスよ。」

またまた松浦さんが顔を赤くした。

先生

「そうか。・・・しっかり守れよ？」聡

「もちろんツスよ！一生守ってみせますよ！」

聡がそう言った時、いきなりバスが止まり、男が3人入ってきた。日本人のようだ。

日本人 A

「お前ら静かにしろ。今から言うことをよく聞け。」

いきなりの出来事にバスの中は静かにならない。しかし、先生だけは黙っている。その状況を見ていた日本人 B が真上に拳銃をならした。そしてバスの中は静かになった。

日本人 A

「もう一度言う。俺の話をよく聞け。今から全員この薬をのんでもらう。ただの睡眠薬だ。他は着いてから話す。」

バスの中がガヤガヤしだした。しかし、先生だけは何も言わない。

悟

「先生?!何ですかこれは?!」

先生

「いいから黙って従え。命を短くしたくないなら。」

日本人達はバスの中の全員が飲んだのを確認してバスを出させた。

・先生は飲んでいない。

目覚め

悟

「ん……」

寝ぼけながら俺は辺りを見渡した。

どうやら俺はベッドで寝ていたようだ。六畳くらいの小さな部屋だ。俺から見て右側に小さな窓があり、正面には何も置いていない机。そして、左側にはドアがある。

.. なんか床が遠いな.. ..

下を見るとこのベッドは二段式の物で、下には田中が寝ていた。

悟

「田中！」

俺は急いでベッドからおりて、田中を起こそうとした。

田中

「……ん……う、うわぁ！」

バスの中でのこともあり、どうやら田中は俺をあの人と勘違いしたようだ。

悟

「俺だよ！俺！」

田中

「……悟君か……」

呼吸を整えて田中が言った。

田中

「ここはどこなの？」

悟

「さあ・俺も今起きたばかりでよく状況が掴めないんだ・・・」

そして、俺は机の椅子の上で、田中はベッドの上で黙って考えこんだ。

鳥の音が聴こえてくる。木のざわめきも。しかし、人の声は聞こえない。

“俺達はあのバスで寝かされた。拉致か？それで俺達二人だけここに閉じ込めているのか？そうだとしたら他の奴等は？解放されたのか？それともまさか・・・殺されたのか？”

しばらくして田中が言った。

田中

「とりあえず部屋を出てみようよ。鍵は開いてるかな？」

悟

「ちよっと待って」

俺はドアを確めた。

悟

「鍵は開いてるみたい」

そして、ドアから顔を覗かせた。

ドアから周りを見ると、同じようなドアが学校のようにたくさん並んでいる。

窓があり、外は明るく、木が生い茂っている。

悟

「宿泊施設か？」

田中

「それなら隣の部屋にも誰かいるんじゃない？」すると、隣のドアが開き、中から聡と亨が出てきた。

田中

「亨君！聡君！」

亨

「田中！悟！」

聡

「どういう事だ？てか、ここは何処なんだ？」

悟

「俺達もよくわからないんだ・・・」

ピッ そろそろ全員起きろ。起きたら建物前の広場に集合だ。
来ない奴はに容赦はしない。

悟

「今のは・・・あの日本人か？・・・」

田中

「どつだろつか・・・」

聡

「とりあえず外に出ようや。他の奴等もいるかもしれない」

その時、横に並んでいたドアが次々と開いた。

亨

「他の部屋にもいたんだ」

田中

「今の放送で皆起きたのかな？」

聡

「ちょっと待て、男子ばかりだぞ！千夏はどこなんだ?!」

確かにそれぞれの部屋から出てきたのは男子ばかりだ。
しかも、他のクラスの男子までいる。

亨

「B組だけじゃなかったのか・・・」

聡

「そんなことはどうでもいい！千夏はどこなんだ？！」

悟

「落ち着けて！広場に行けば会えるかもしれないだろ！」

正直会えるかどうかは自信がなかった。しかし、そう願うしかない。

聡

「そんじゃ俺は先に行つとくぞ」

そう言うと、聡は急いでこの建造物の前にあるという広場へ向かった。

亨

「俺達も行くぞ。状況からして集合したほうが良さそうだ。」

田中

「そうだね」

そして、俺達三人も広場へ向かった。

陣取り

俺達は皆の流れに乗って広場へ向かっていた。
皆あちこちで話ながら歩いている。

「あいつら誰？」

「俺達どうなるんだろう・・・」

「お前達もハイジャックされたのか？」

「僕金子先生が撃たれた時に気絶して何も覚えてないや・・・」

！！

歩きながら会話を盗み聞きしていた俺は驚いた。

悟

「おい、金子先生が撃たれたらしいよ」

田中と亨は驚いた顔をした。

田中

「それなら、うちのクラスの谷口先生はどうなの？撃たれなかったよね？」

亨

「つるんでたのか？」

悟

「かもしれないな」

そして俺達は玄関前の広場に着いた。

そこには女子も集まっていた。しかし、大半の女子が泣いている。そして、入口前の高台にはあのバスに乗り込んできた日本人を含む数名の日本人がいる。

悟

「・・・女子もいるみたいだな。聡は松浦さんに会えたかな？」

亨

「まあこれくらいならすぐに見つかるだろ」

田中

「見た感じじゃ全クラスが拉致されたわけじゃなさそうだね」

確かに全クラスにしては人が少ない。半分くらいしかない。

田中

「AとD組ってとこかな？」

悟

「そうみたいだな」

施設から人が出てこなくなると、日本人Aが叫んだ。

日本人A

「全員クラスごとにさっさと並べ！説明を始める！！」

この一声で皆が一斉に並び始めた。俺のクラスは田中が並ばせている。

悟

「お、聡・・・松浦さんには会えた？」

聡

「ああ、今慰めてたところだったよ。・・・たく、ホントにアイツ等許せねえ。そのゼツテエうちぶちのめしてやる！」

日本人が整列を確認すると、日本人Aがまた叫んだ。

日本人A

「いない奴がいたら知らせに来い！」

「俺のクラスは・・・皆いるな」

その時、A組の委員会の上原が日本人Aの元へ行き、何か話している。そして、日本人Aが側にいる人に指示を出した。日本人達が慌ただしくなった。

悟

「誰か逃げ出したのか？」

聡

「そうみたいだな・・・」

皆が並び、皆が泣いたり、ひそひそ話をしからしばらくして、あの日本人Aが高台に立った。

日本人

「静かにしろ！今から説明を始める。これからお前等AとD組とここから少し離れた場所で同じように待機しているEとH組で団体戦を行ってもらおう。ルールは簡単だ。相手の陣を取ったら勝ちだ。期間はない。勝ったら日本に帰してやる。しかし、負けたら永遠にこの孤島に住むことになる。逃げるなよ。武器は東の倉庫、食糧は施設裏の倉庫にある。質問はあるか？」

皆は手を挙げることなく、黙っている。小さな声で話している奴もいる。

“陣取りって・・・遊びのことか？武器って意味分からないだろ”

しばらくして日本人がまた話を始めようとしたとき、田中が手を挙げた。

田中

「質問です！」

皆が田中を注目した。

日本人A

「なんだ？」

田中

「どのように事を行うか細かく説明をお願いします。」

日本人A

「お前はイクサつてのを知らないのか？普通に戦って全滅させて陣を取りゃいいんだよ」

皆が静まり返った。また泣き出す奴もいる。

・・・え？

田中

「そんなの無理に決まってるじゃないですか！僕はしません！」

田中が前に出て大きく否定した。

田中に続き亨が前に出て言った。

亨

「俺もしない！」

「俺もだ！」

「私も！」

さらに続いて数名が前にでた。

そして俺も出ようとしたとき

パン！パン！

側にいた日本人が上に向けて拳銃を撃った。

日本人A

「参加しない奴は殺す！死にたい奴だけ前に出ろ！」

俺は足を止めた。そして、前に出ていた人が元の場所に戻って行った。

聡

「ありえねえだろ・・・マジで殺し合えってことかよ・・・」

最初の犠牲者

日本人A

「このゲームに参加しない奴は容赦なく殺す。このゲームから逃げ出そうとしたA組の奥野をこれから処罰に与える。まだ信じれていない奴は目に焼き付けとけ」

生徒がざわつく

聡

「奥野ってあのヤンキーヅラした奴か？」

悟

「ああ、一年のときに同じクラスだったけど、相当態度が悪い奴だった。けど、いくらなんでもこんなところで・・・」

俺は正直まだ日本人Aの言葉を受け入れられずにいた。
何かの落ちがあることを願っていた。

しかし、最初の犠牲者が出ることとなった。

広場の近くの茂みから日本人に無理矢理連れて来られている奥野が見えた。

そして、奥野がその金色の髪を太陽に輝かせながら高台に登っている。いや、強制的に登らせられていると言った方が正しい。

高台に登り、奥野が日本人Aを睨み付けた。その時日本人Aと目が

合い、日本人Aは奥野を殴った。その勢いで奥野は1、5メートル程の高さから落ちた。

日本人A

「ふざけてんじゃねえぞ！？糞ガキ！お前のせいでこちらの楽しみが二人分減っちゃまったじゃねえか！」

そう言うと日本人Aは持っていた拳銃を奥野に向けた。

奥野は見上げながら目を大きく開いた。

パーン！

音と共に奥野が地面に横たわった。

大量の血が金色の髪の毛を赤く染め始めた。

生徒では泣き叫び、吐き、さらには気を失う人までいた。

広場は地獄へと化した。

誰も行きたいとは思わない、悪臭と悲鳴の世界である。

もう一方では（前書き）

ここでは川添^{かわぞえ}早織からの視点にかえます

もう一方では

“え……?”

私はその言葉がうまく聞き取れなかった。

私のクラス（H）の委員長の工藤晴彦君が驚きの顔で言った。
ハルヒコ

晴彦

「よく意味が分かりません。もう少し分かりやすくお願いします」

日本人E

「わかった。しっかりと聞いてくれ。今からお前達に向こうで待機しているA～D組と戦ってもらう。全滅させたら勝ちだ。期限はない。だが、食糧には限度があるからさっさとしないと腹が減るぞ。そうだった。食糧と武器はこの施設の裏の大きな倉庫にある。他に何か質問は？」

これを聞いたとき、ふと私の目から涙が溢れた。

薫

「……早織……大丈夫?……」

涙を流している私に薫が同情するように慰めてくれた。

薫

「きつと、何かの間違いだから……きつとすぐに助けが来てくれる

わ・・・今はしつかり意識を保とうよ」「

早織

「・・・本当に薫は強いね・・・」

薫は涙を流している。それでも私はとても元気付いたような気がした。

その時、

トゥルルルル・トゥルルルル・

日本人の携帯がなった。

日本人は何か話している。

そして、ため息をつくともた話だした。

日本人E

「よく聞いてくれ。向こうの方で一人違反した奴が出てしまってな・
・そいつが処刑された」

皆が固まった。

このときはなぜか暖かい季節のはずなのに、背筋がゾクツとくるような風が吹いた。私は不安でたまらなかった。そして薫に救いを求めるように聞いた。

早織

「・・・きつと嘘よね?」

薫

「うん・・・きつと嘘よ・・・」

日本人Eはさらに言った。

日本人E

「悪いが、人数調整のためにお前達から一人死んでもらう」

誰も反抗しようとしなかった。

もし自分が選ばれたら・・・と思うととても言葉が出ない。

日本人E

「先に死にたい奴はいるか？・・・っているわけないか。そんなじゃ俺が選ばせてもらうぞ」

そういうと、日本人Eは名簿らしき物を持ち、目を通した。

日本人E

「・・・春山^{しんじ}慎二出てこい」

皆の注目が一気に春山君に集まった。

慎二

「ああ・・・嫌だ・・・嫌だ・・・イヤダー！！」

そういうと、春山君は逃げ出そうとした。けど、私達を取り囲んでいる日本人にあっけなく捕まってしまった。

薫

「春山って人、去年早織がいじめからかばってあげた人じゃない？」

春山君は去年私と同じクラスだった。

臆病者でオタクであることから、一部の男子にいじめられていた。けど、性格はとても親切でいい人だった。

そんは春山君をいじめる男子が許せないで私はその男子にビンタしたことがあった。

“ 助けてあげたい・・・けど、声が出ない・・・ ”

私は再び涙が出てきた。

“ 何で私はこんなに臆病者なの？目の前で人が殺すと脅されているのに何で声が出ないの？ ”

私は心の中では春山君を助けたくてたまらなかった。けど怖くて声が出ない。

そして、春山君が日本人Eのいる高台に上からされた。

春山君はまるで生まれたばかりの赤ちゃんがたくさんのシワを作っ
て泣いているかのような顔で泣いている。

慎二

「うう・・・やめて・・・やめて・・・えっぐ・・・お願い・・・」

日本人Eはそんな春山君を気にも止めずに生徒達に向かって

日本人E

「まだこの状況を信じていない人はこれで理解してくれ」

そういつと日本人Eは押さえられている春山君の頭に拳銃をつけた。

春山君の叫び声が消え、その場の時間が一瞬止まったかのように思えた。

パーン！

血が吹き飛んだ。

春山君はすごい形相のままに頭を伏せた。さらにその頭からは大量の血が流れ始めている。

生徒達は化け物でも見たかのように叫び、泣き、気絶する人までいた。

早織

「こんなのイヤ・・・」

葛藤

まだ酷い状況の中、俺もこの空気に溶け込んでいた。

悟

「はあ・・・はあ・・・」

「なんて状況だ・・・どうしよう俺・・・あつちの組を殺らなきゃ・・・殺らなきゃ俺が殺られる。俺はまだ死にたくない・・・」

聡

「はあ・・・はあ・・・悟・・・俺はこのふざけたゲームに乗りたくない・・・けど・・・けど、千夏を守るために俺は戦う。絶対に俺は千夏を守る。もちろん俺も生き延びたい。だから、悟、一生のお願いだ。親友として、助け合って、一緒に生き延びよう。」

聡の顔はいつもの冗談混じりとは全く違った。少し欲が混じってはいいるが、けっしてそれは人間として悪いものではない。物事を決心した人間としての立派な顔だった。

しかし、これを聞いた時、俺の頭に、ふと、川添さんの顔が浮かんできた。

「・・・向こうに川添さんがいるのを忘れてた・・・俺は好きな人を殺してまで生きようとしていたんだろうか・・・」

向こうには川添さんがいる。

俺の好きな人だ。

とても殺せない。

自らの手で殺すことはなくても、結局は川添さんを犠牲にして生き延びることになる。

かと言って、川添さんを殺さないとしたら、俺は川添さんのために何ができる？

見方を裏切って敵に着けばいいのか？

こっちにはこっちで大切な仲間がいる。目の前には聡がいる。

俺がこれから生きていくとしたら一生支え合っていく仲だ。絶対に欠かせない親友だ。

この親友が今俺に本当の意味での、一生のお願い、をしている。

それに俺もまだ死にたくはない。

悟

「・・・ああ。一緒に生きよう」

聡

「・・・よかった、それでこそ俺の親友だ」

俺と聡はがっちりと握手した。

この状況を二人は抜け出した。
いつまでは嘆いてはいられなかった。

俺は決心した。

この判断は間違っではない。

俺は精一杯生きることにした。

.. 早く川添さんの事は忘れよう..

特別な関係

今になって思えば、俺達二人は共通している事がたくさんある。

好きなバンド・色・服・芸能人・食べ物・・・

嫌いな食べ物はピーマン・ニンジン

それに一人っ子。

面白いくらいに共通している。

しかし、その共通点でも特に驚くのは、二人とも両親がいないことだ。

俺は小学生四年のときになってからこれまで自分を育ててくれたのが親戚のおじさんとおばさんであることを知った。俺の両親は俺が記憶もないときに二人一緒に交通事故で死んだらしい。なので俺はこれまで自分を育ててくれたのが本当の親でないことを知っても、あまり気にしないでした。

しかし、聡は違った。

聡の両親が死んだのは俺が真実を知ってから間もない時だった。しかも、死因は強盗らしい。

その強盗は大麻をしていたという。

薬をしている人にはよくあることらしいが、その強盗は大麻に自分の金を使いはたし、とうとう他人を襲ってまで金を得ようとしたらしい。

そこで襲われたのが聡の両親だった。

俺はもちろん聡の両親のお通夜に行った。

あの時の聡の顔は今でも忘れない。

あのいつも馬鹿らしく明るく振る舞っていた聡の顔には生氣などなかった。

その状態のまま目から涙を流していた。

俺はとても聡に近寄れなかった。

数日してから聡は学校に登校するようになった。

その日は少しだけ曇っていた。

俺はいつも聡と一緒に登校していたので、はげますつもりであの日以降も毎朝聡の家に顔を出した。

だから久しぶりに聡が学校に登校するようになったときはとても嬉しかった。

聡は親が死んだにも関わらずクラスで明るく振る舞った。

しかし、馬鹿らしさが無くなっていった。

聡が久しぶりに登校した日の帰り道、俺はほんの少しだけ変わった聡に話した。

悟

「実はな、俺、お母さんとお父さんいないんだ」

聡はとても驚いた様子だった。しかし、

聡

「そんなこと言つなよ！！俺の母ちゃんと父ちゃんは死んじゃいない！今だつて俺を見ているに決まってる！！だからお前の母ちゃんと父ちゃんも今お前のことを見ているに違いない！！」

聡は泣きそうであつたが堪えていた。

・今だつて俺を見ている、

・だから聡は馬鹿らしさを捨てたんだ

少しだけ曇つていた空が明るくなってきたような気がした。

俺は両親を知らない。しかし、その時から俺の両親への関心が大きくなつていった。

その日俺は初めて両親の写真をおじさん達にみせてもらった。

どうやら俺は母の方と似ているようだ。写真を見てすぐにわかった。

おじさん

「悟の親父さんは子供の頃から気が強くてな。色々あつたけど私に

とってとってでも頼もしい兄さんだったよ」

たしか、そんなことをおじさんは言っていた。

次の日は完全に晴れていた。

朝、いつものように聡の家に行き、聡が家から出てきてから俺は言った。

悟

「おはよう！父さん達が見てるから今日も明るく行くつや！」

そして聡は笑顔で

聡

「ああ！今日も乗ってくぜ！」

と返してくれた。

風が吹き、花びらが舞った。

それが俺達二人を包み込み、まるで俺達二人の親のように感じた。

心地よい春の日差しの中、俺達二人はいつも以上に明るく、歌いながら登校した。

こんな感じで俺と聡は特別の仲になっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4390d/>

君のために～孤独な戦い～

2010年11月14日09時42分発行